海外事情

クラブハウス「Fountain House」の見学報告

銀山章代　巽　絵理
四條畷学園大学
リハビリテーション学部

はじめに

今春，米国のNew Yorkで，クラブハウス「Fountain House」を見学する機会を得た．

「Fountain House」での活動は，米国国内にとどまらず，世界的にも注目され，クラブハウスモデルとして，世界各地に300以上のクラブハウスがつくられている．日本ではあまり馴染みのない「クラブハウス」の概要と「Fountain House」の様子を報告する．

Ⅰ．歴　史

1948年にアメリカの州立病院を退院した4人の仲間が"We are not alone.（私たちはひとりぼっちじゃない）"を合言葉に，通称WANAという自助グループ活動をはじめ，その活動から発展した．その後，1950年代にジョン・ビヤードが，重度で長期慢性の精神障害者のために，独自のリハビリテーション・プログラムの基盤を作りあげた．この方式が精神障害者のリハビリテーションに効果があるということで，1977年，国立精神保健研究所の特別基金で，職員研修プログラムが始められ，アメリカの各地でファウンテンハウス方式（クラブハウスモデル）のクラブハウスが設立される．その前身である自助グループWANAの思想が引き継がれ，障害者自身の組織としての活動が行われている．

「Fountain House」の名前は，1984年，その活動に賛同した篤志家の寄贈により，中庭に泉（fountain）のある家に根拠地を得たことで名付けられた．（写真1）

Ⅱ．クラブハウスモデルの基準

米国国内ばかりで無く，国際的な基準を設定している．クラブハウスモデルの基準作りの目的はクラブハウスの水準を維持する為である．また基準が必要な理由のひとつは基準にクラブハウスの活動が記述されていると，プログラムに必要な資金援助を要求しやすいこと．二つ目は，基準を見れば，過渡的雇用はシェルタード・ワークショップとも違うし，病院で行うセラピーとも違うことが明らかになるなど，活動の独自性が明らかになる．

この基準は，35項目にわたる．項目には，会員（メンバーシップ）・メンバーとスタッフの関係・クラブハウスの場所・ユニット活動・就労（通渡的雇用と一般就労）・クラブハウスの機能・財政・管理方式・運営などがある．

Ⅲ．Fountain Houseでの活動

1．職業前デイプログラム（pre-vocational day program）

クラブハウスを運営するために必要な作業をメンバーとスタッフとともに行う中で，メンバーが障害レベルにかかわらず，人の役に立つことを体験し，自分の能力を再認識し，生きがいを感じ，将来への新たな希望を自然に育む場である．

実際の作業としては，次のような作業がある．

① 昼食などを提供するための買物，献立，調理，配膳等を含む料理部門（写真2．3．4）
② 一般事務（写真5）
③ 会員の統計や調査・研究（写真6．7．8）
④ 経理事務
⑤ 会報の出版，広報用のフィルム作成などの広報活動
⑥ 電話交換
⑦ ゲストや入会員の案内（写真9）
⑧ 建物の清掃，修理，保護などのメンテナンス
⑨ 活動を休んでいるメンバーを訪問したり，入院中のメンバーを見舞ったりする

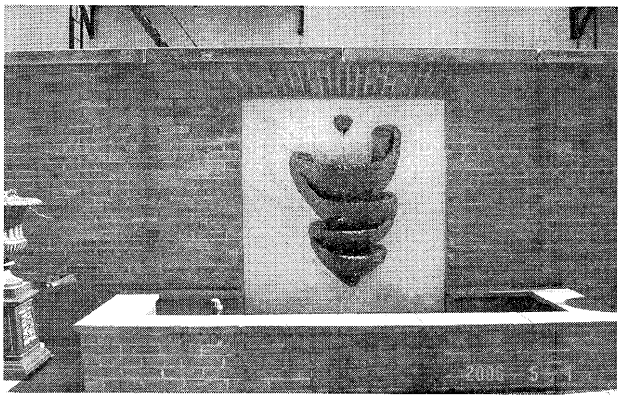

写真１　中庭にある泉

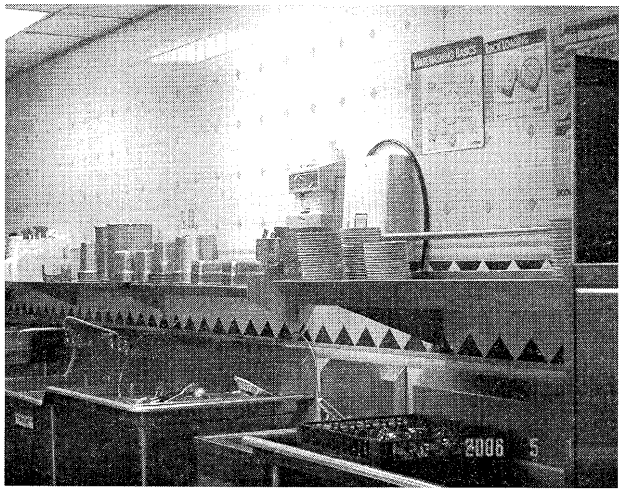

写真２　調理場

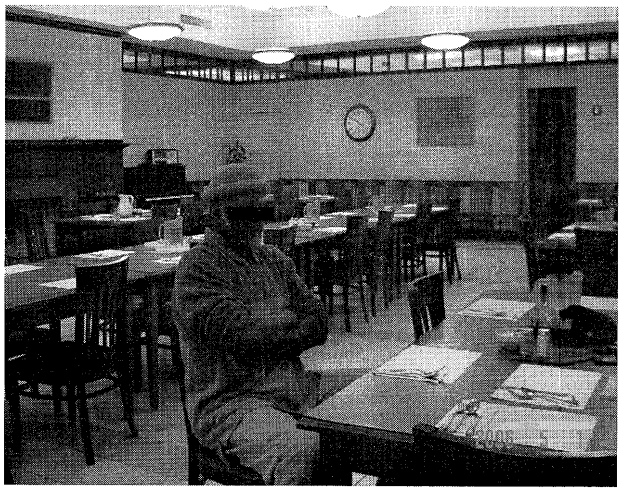

写真３　食　堂

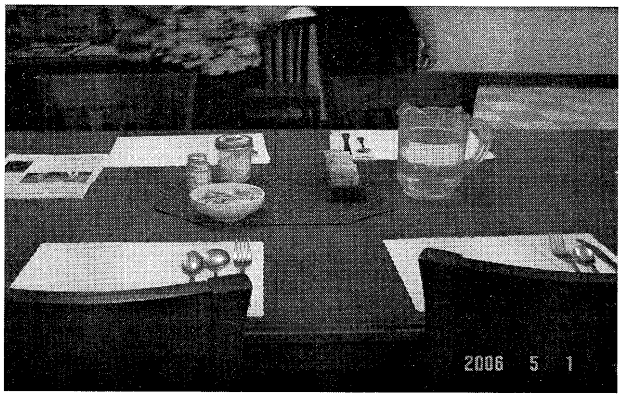

写真４　配膳テーブルセッティング

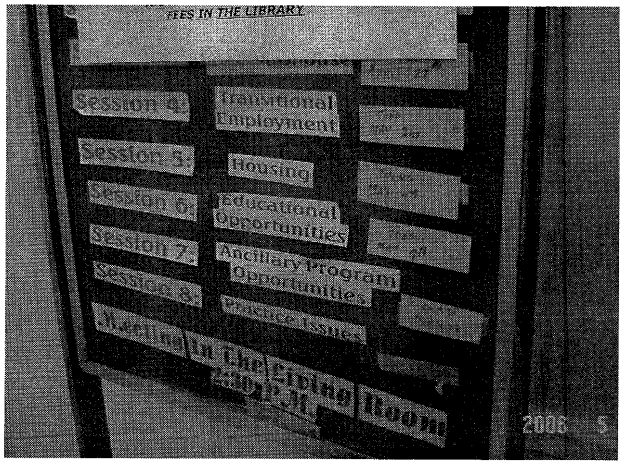

写真５　プログラムの掲示

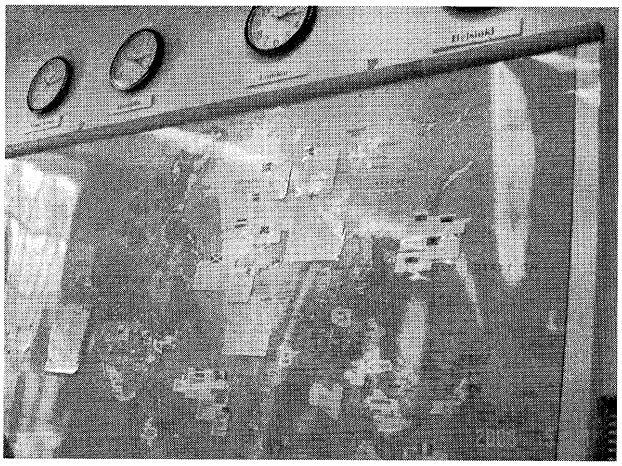

写真６　世界のクラブハウスモデル施設の所在地

２．過渡的雇用プログラム（transitional employment）

精神障害者がフルタイムで就職することはきわめて困難である．まずは，パートタイムで短期間，簡単な仕事で「働く体験をもつこと」から始める．そのための職場を地域の一般企業の中に準備し，これらの職場を何カ所か体験する中で，職業生活への適応を高めようというものである．最終的な一般雇用ではなく，一時的で，過渡的な雇用であり，一般雇用へ移行するための通過的なプロセスである．

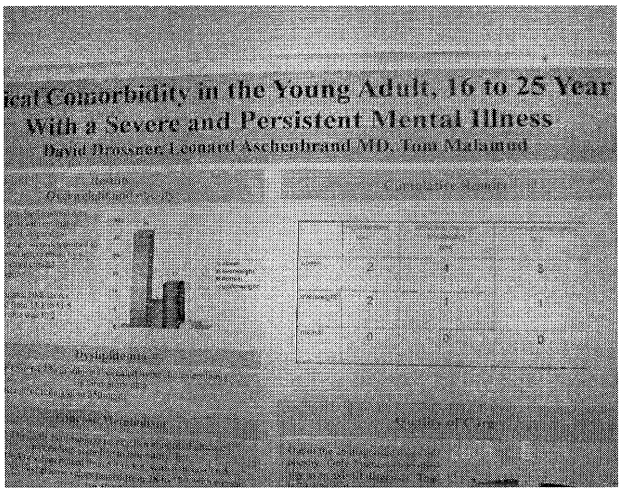

写真７　研究発表のポスター

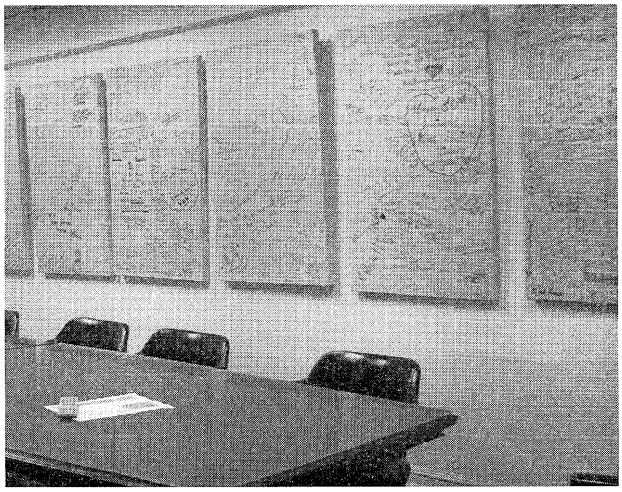

写真８　ミーティングの部屋

写真９　ゲストの案内

３．夜間・週末プログラム（社交的プログラム）

精神障害者は地域社会で人間関係をうまく処理できずに孤立しがちである．このプログラムでは，そういった人々が集まり，交友関係を作り，社会性を身につけることができるように企画されたもので，さまざまな活動が行われている．例えば，美術クラブ，写真クラブ，劇やコーラス，ボーリングなどのスポーツ，映画・演劇鑑賞，ゲームなど多彩である．これらの活動は，日中は行わない．それは一般に働いている人々と同じ時間帯に行うことにより，地域での適応を容易にするためである．

４．住居対策

病院から退院してまず問題になるのが住むところである．職業を持たない精神障害者は公的扶助を唯一の生活財源とする場合が多く，きちんとした住宅に入居することはきわめて困難な状況にある．そのため，Fountain House では手ごろな家賃のアパートをメンバーに賃貸することにし，メンバー２～３人がいっしょに生活できるようにした．ここに住む条件は，積極的にFountain House のデイプログラムに参加することある．この条件を満せば，居住期間に制限なく住むことができる．

５．中古品再生販売店経営

Fountain House のアパートに住むメンバーのために，中古の家具を寄贈したいという人が増えたため，この申し出に応えて中古品再生販売店を開設した．これにより，手ごろな価格で家具，衣類，靴，電気製品などをメンバーや地域の人たちが得ることができるようになったと同時に，就職前のメンバーに，倉庫係，商品の分類，値付け，販売，レジ係などの仕事を体験する場となっている．

6．研　　修

全米及び世界各国にあるクラブハウスのスタッフ，メンバー及びディレクターに対し，3週間の実地研修を行っている．この活動により，各地にFountain House モデルのクラブハウスが充実し，拡大してきている．

Ⅳ．クラブハウスの特徴

クラブハウスモデルの基準や活動から「クラブハウス」の特徴を列挙する．

・メンバーは精神病の患者でもなければ，治療や訓練，サービスを受けるクライエントでもない．働く職員はスタッフと呼ばれ，精神科の医師でもなければ，精神病を治療する治療者や指導者あるいは監督者ではなく，クラブハウスの運営のためにメンバーとともに働き，クラブハウスの運営に責任を持つ人たちである．

・メンバーとスタッフ（職員）がそれぞれの責任を分担して，クラブハウスを共同で運営することを通して，仲間の支援に役立つという経験を積み重ねていくこと．

・日常活動を通して自信と誇りを取り戻し，地域の一般企業での過渡的雇用を経て，自立生活を獲得することも可能になる．

・期待され，必要とされ，評価を受ける場所として，クラブハウスが基本的な人間のニーズを満足させてくれるから，やって来るのである．

・クラブハウスでの仕事はメンバーとなることと同様に，自発的なものである．メンバーは指図や強制により仕事を強いられない．

・メンバーが初めて訪れたとき，ただそこに座っていて，何もしなくてもよいということがある．彼らがメンバーや職員に歓迎されるのは，まさにクラブハウスに来たこと自体が一つの偉大な勇気と考えられるからである．彼らは参加することを勧められるが，参加はメンバーとしての必須条件ではない．

おわりに

クラブハウスモデルの提供する活動を見学し，日本での精神障害者に提供されている活動との相違点を痛感した．しかし一方で、作業療法を実施する際の留意点とクラブハウスモデルの共通点も多かった．

相違点は大きく3点ある．まず，一点は活動の主体はどこか？という点である．米国では，医療を受けるには個人の負担金が高く，入院期間の短期化が進み，多くの精神疾患を持った人が地域で暮らしている．その人々をサポートするために障害者自身が組織を作り発展していったのがクラブハウスである．一方日本では精神障害者の入院の長期化と人権を侵害した精神病院での処遇改善のために精神保健法が制定され，その後精神保健福祉が制定され長期入院患者の退院促進が進められている．制度や政策が先行している印象はぬぐえない．二点目は，メンバーとスタッフの関係である．クラブハウスモデルはメンバーとスタッフの関係や役割の定義をあえてしていない．日本の医療・福祉は，対象者はお金を払って利用する．メンバーとスタッフの関係は医療・サービス提供者対それを受ける人である．三点目は，その活動の広がりと細やかさである．クラブハウスモデルはメンバーの日々の生活から就労へ必要と思われることすべてをクラブハウスで提供しようとしている．日本ではデイケア・グループホーム・地域生活支援センター・授産施設・作業所などが存在しているが，連携が伴っていない．

共通点は，クラブハウスの特徴で述べた点に多く含まれている．たとえば，参加が強制されないことや，主体性が重んじられること．まずは通ってくることからはじめること．仲間の役立つという経験を積み重ねていくことの重要性などである．